

舞楽の美的鑑賞における日独文化比較

櫃割 仁平

ヘルムートシュミット大学 ポスドク研究員 / 日本学術振興会 海外特別研究員

Cross-cultural Comparison of Aesthetic Appreciation of Bugaku Between Japanese and German

Jimpei Hitsuwari

Helmut Schmidt University, Postdoctoral Research Fellow /

Japan Society for the Promotion of Science, Overseas Research Fellow

Abstract

This study explores cross-cultural differences in the aesthetic appreciation of bugaku, a traditional Japanese court dance performed as part of gagaku music. Through a mixed-method approach involving interviews, surveys, and a large-scale online experiment with Japanese and German participants (N = 801), we examined how cultural background influences the perception and evaluation of bugaku. Study 1 revealed that while experienced German viewers expressed impression using terms such as "sublime" and "awe," the general German public often found bugaku difficult to comprehend upon first exposure. Study 2 quantitatively demonstrated that Japanese participants rated bugaku higher in terms of preference, transcendental experience, gracefulness, and perceived harmony, whereas German participants scored higher in movement comprehension. Furthermore, individual differences such as attitude towards ambiguity significantly moderated aesthetic evaluation in culturally specific ways. These findings highlight the cultural grounding of aesthetic experience and offer insights into how traditional Japanese aesthetics, including the concept of *ma*, may be interpreted across cultures. The study contributes to the promotion of traditional Japanese arts and to fostering mutual cultural understanding between Japan and Germany.

1. はじめに

経験美学は、実証的方法を用いて芸術的認知と美的処理を検討する研究分野であり、過去20年間で劇的に発展してきた (e.g., Jacobsen, 2006)。この歴史における中心的な研究対象は視覚芸術や音楽だが、美的処理はそれらに限定されず、近年では嗅覚 (Hitsuwari et al., 2023) や触覚 (Marschallek et al., 2023) に焦点を当てた研究も増加している。特に、ダンスは身体感覚と動きに関連し、経験美学の中で急速に成長している分野である (e.g., Christensen & Calvo-Merino, 2013)。その中でも、神経科学的アプローチはダンスの知覚と鑑賞の理解に大きく貢献してきた (Cross, 2025)。ダンスは各文化の背景を反映しており、文化間比較研究では、西洋人とインド人のダンス評価に内集団バイアスが示された (Darda & Cross, 2022)。

本研究では、日本の伝統的宮廷舞踊「舞楽」に焦点を当てる。舞楽は雅楽の一部として演じられ (Sakata & Kurasaka, 2011)、2009年にユネスコの無形文化遺産に登録された。

舞楽の特徴的な概念「間（ま）」は、フレーズと意味に応じて変化する時間間隔として表れ (Daikoku & Yumoto, 2020), 文化によって異なる知覚をもたらす可能性がある。また認知における文化的差異として、分析的処理への西洋の傾向と全体的処理への東洋の傾向が指摘されている (Masuda et al., 2008)。本研究の目的は、日本人とドイツ人の参加者を対象に舞楽の知覚と評価を調査することである。具体的には、文化的背景が美的鑑賞と動きと音楽の関係の知覚にどのように影響するか、また曖昧さへの態度やダンスの熟達度などの個人特性がどのように調整効果をもたらすかを検討する。

2. 研究1

2.1 方法

2.1.1 参加者

ケルン大学の雅楽クラスの学生と天理日独文化工房 (<http://www.tenri-kw.de/en/aktuell-english/>) の雅楽クラス参加者にアンケートを実施した。舞楽を鑑賞した経験のある7名 (平均年齢31.86歳±12.95歳, 女性5名, 男性1名, その他1名) を分析対象とした。また、ドイツで24年間雅楽・舞楽普及活動を行い、ケルン大学で教鞭を執る志水美郎博士 (YS) に半構造化インタビューを実施した。

2.1.2 参加者

アンケートは、(1) 舞楽の観覧経験、(2) 舞楽の名称、(3) 印象、(4) 5つの形容詞による印象表現、(5) 西洋的ダンスとの差異、の5問で構成された。YSへのインタビューでは、(1) ドイツでの舞楽の反応、(2) ドイツ人への雅楽・舞楽の魅力的な伝え方、(3) 西洋的ダンスとの差異、について約25分間質問した。

2.2 結果と考察

2.2.1 ドイツ人舞楽観覧経験者の印象

参加者の印象は三つの観点から要約できる。第一に、多くの参加者は舞楽に感銘を受け、「印象的」「崇高」「畏敬の念」などの言葉で表現した。これはダンスの経験美学研究 (Grosbras et al., 2012) と一致し、雅楽の宗教的背景から自己超越的感情も喚起されたと考えられる。第二に、「流れるような」「ゆっくりとした」「穏やかな」といった動きの特徴が言及された。この結果は日本舞踊研究 (坂田他, 2003) や日中韓の舞踊比較研究 (Zheng et al., 2020) と一致している。第三に、「非常に正確」「細部まで入念」といった精密さも言及された。「入念さ」は日本文化の特徴とされ (Saito, 2007), 「機械的」という表現からも動きの正確さが印象づけられたと推測される。

2.2.2 ドイツで活動する雅楽・舞楽指導者の印象

YSの回答からは三つの特徴が浮かび上がった。第一に、ドイツ人は舞楽を理解しにくく、初見では好印象を持たないことが多い。ただし、現代音楽に精通した少数派やアニメの影響を受けた層には受容されている。第二に、舞楽には「間」があり、これは単なる空白ではなく緊張感や予期を含む (Daikoku & Yumoto, 2020)。これは「不一致」「即興性」「曖昧さ」として表現され、西洋の舞踊との大きな違いとなっている。第三に、ドイツ人は練習を通じて雅楽・舞楽のリズムに慣れることができる。「ある程度練習すると、誰もが不安定なリズムに安定感を感じる」とYSは述べ、文化的背景が異なっても人々は共演できる普遍的能力を持つと指摘した。

2.2.3 研究1のまとめ

総合すると、アンケート回答者は舞楽に好印象を持つ一方、YSの経験では多くのドイツ人は初見では理解しにくさを感じる。この差異は回答者の選択バイアスを示唆している。また、「ゆっくりとした」「流れるような」動きと「間」の概念は舞楽の特徴として認識され、継続的な接触と実践が異文化理解に重要であることを示唆している。

3. 研究2

3.1 方法

3.1.1 参加者

参加者は日本人についてはCrowdWorks、ドイツ人についてはProlificを通じて募集された。合計801名の参加者が研究を完了した（日本人：N=392、男性214名、女性176名、その他2名、平均年齢44.16歳±9.94歳；ドイツ人：N=409、男性263名、女性140名、その他6名、平均年齢33.14歳±10.94歳）。参加条件は18歳以上であること、それぞれ日本またはドイツに居住していること、日本語またはドイツ語を第一言語としていることであった。

3.1.2 刺激

研究で使用された舞楽ビデオは、プロの雅楽演奏ユニット「雅楽下熊健」に事前に許諾を得た後、「胡飲酒 (<https://www.youtube.com/watch?v=GBjYtMPGJXA>)」のパフォーマンスを使用した。参加者の疲労を最小限に抑えるため、パフォーマンスのクライマックス部分 (胡飲酒破) のみに編集し、7分43秒の抜粋を作成した。

3.1.3 舞楽評価質問票

参加者は7点リッカート尺度 (1 = 「全く同意しない」, 7 = 「強く同意する」) を用いて39項目で舞楽を評価した。項目は先行研究と研究1に基づいて選ばれ, 「美しさ」や「畏敬の念」や「流れるような」(研究1より) などが含まれていた。これらの項目は, 鑑賞者の美的・情動的反応を多面的に捉えることを目的としていた。

3.1.4 個人特性質問票

本研究では以下の個人特性尺度が使用された: ゴールドスミスダンス洗練度指標 (舞踊関連のスキルと経験における個人差を評価), 美的体験欲求尺度 (美的体験に対する個人の好みを測定), 多次元曖昧さに対する態度尺度 (曖昧な状況に対する個人の態度), 経験への開放性, ダンス親密度 (舞楽と西洋伝統ダンスに対する親密度), 日本文化への接触 (日本の伝統芸術への興味, 日本語能力, 日本人との交流など)。

3.2 結果と考察

3.2.1 因子分析と平均比較

39の変数について因子分析を実施した結果, 両グループともに5因子解 (好み, 超越的体験, 優美さ, 調和と構造, 動きの理解) が適切であることが示された。日本人参加者はドイツ人参加者よりも好み ($t(799) = 10.31, p < .001, d = .73$), 超越的体験 ($t(799) = 8.29, p < .001, d = .58$), 優美さ ($t(799) = 6.14, p < .001, d = .43$), 調和と構造 ($t(799) = 6.46, p < .001, d = .45$)で有意に高いスコアを示した一方, ドイツ人グループは動きの理解が有意に高かった ($t(799) = -4.80, p < .001, d = -.34$) (図1)。

3.2.2 個人特性の調整効果

階層的重回帰分析を実施し, 好み, 超越的体験, 優美さの3つの結果変数を予測した。好みについては, 日本人参加者はドイツ人参加者よりも舞楽をより好意的に評価し ($b = 0.70, p < .001$), 調和と構造が好みを強く予測した ($b = 0.81, p < .001$)。文化と動きの理解の交互作用がみられ ($b = 0.15, p = .016$), 動きの理解の高さはドイツ人参加者の間でのみ好みの低下と関連していた (図2左)。文化と曖昧さに対する不快感の間にも有意な交互作用がみられ ($b = -0.18, p = .008$), 曖昧さへの不快感は日本人参加者のみにおいて好みを負に予測した (図2中央)。超越的体験については, 日本人参加者の方が高く ($b = 0.49, p < .001$), 調和と構造が強く予測した ($b = 0.86, p < .001$)。優美さについては, 調和と構造が強い予測因子となり ($b = 0.91, p < .001$), この影響はドイツ人参加者でより顕著であった (図2右)。

3.2.3 考察

予想通り、好みや優美さなどのスコアは日本人の方がドイツ人よりも高くなった一方で、動きの理解のスコアはドイツ人の方が高くなった。これは、自文化のダンスをより好するというDarda and Cross (2022) の結果と一致する。日本社会の中で、意識的であれ無意識的であれ、雅楽の音楽に触れたり、舞を鑑賞したりしてきたことによって、ドイツ人より親しみが高く、好みや優美さの評価を高くした可能性がある。また、ドイツ人がより動きの理解をしようとしていたことは、欧米の分析的認知処理 (vs. 東アジアの全体的認知処理) が関係していたかもしれない。欧米人は、視覚芸術の対象物に注目し、対象物が大きく映っている時に評価を高くする一方、東アジア人は、背景情報や文脈にも注目し、背景が広く対象物が比較的小さく映っている時も評価を低くしない (Masuda et al., 2008)。ダンスの鑑賞においても、親しみの低い舞楽を前にし、1つひとつの細かい動きにフォーカスして鑑賞をしようとした可能性がある。また、舞楽の評価に与える要因についても、文化差が見られ、ドイツ人にとっては動きの理解が、日本人にとっては曖昧さへの不快感が好みの評価を下げる要因となった。動きを理解しようとするほど、好みの評価が下がってしまったことは、曖昧なままでもダンスを楽しむことができうとした先行研究と一致する (Lee et al., 2025)。また、曖昧さへの不快感を感じやすい日本人は、好み下がったが、日本人であっても、舞楽の意味 (動きの意味、作品全体の物語など) をすべて理解する人は少なく、曖昧さを感じてしまい、評価を下げてしまったのかもしれない。さらに、調和と構造の評価は、両文化で優美さの評価を上げる要因になったが、特に日本人でその影響が小さかった。日本人は、不協和 (動きに違和感を感じるなど) をドイツ人よりは許容していることを示唆しており、間の感覚を体得していることがこの差に影響しているかもしれない (Daikoku & Yumoto, 2020)。

4. 結論

本研究では、日本の伝統的舞踊である舞楽に対する美的評価を、日本人とドイツ人という異なる文化的背景をもつ参加者を対象に比較し、舞楽の知覚・好み・感情反応における文化差とその調整要因を明らかにした。研究1では、ドイツにおける舞楽観覧経験者および指導者への調査・インタビューを通じて、舞楽に対する印象の多様性と、「間」や曖昧さといった文化特有の美的特徴が受容に与える影響が示された。研究2では、量的データに基づき、日本人は舞楽をより好意的に、また超越的かつ優美に評価する傾向がある一方で、ドイツ人は動きの理解において高いスコアを示した。さらに、評価に影響を及ぼす個人特性も文化によって異なり、日本人では曖昧さへの不快感、ドイツ人では動きの理解が舞楽の好みに影響することが明らかとなった。

これらの結果は、文化的背景が舞踊の美的評価に深く関与していることを示すとともに、曖昧さや「間」といった日本、または東アジア特有の美意識が異文化の中でどのように受容・理解されうるかについて貴重な知見を提供する。また、本研究は、舞楽という日本の伝統文化の美的価値を再評価する機会を提供すると同時に、異文化間の美的理解の可能性を探ることにより、国際的な文化理解の深化に寄与するものである。とりわけ、舞楽の海外での受容に関する知見は、日本の伝統芸術の文化振興や継承に資するものであり、教育・芸術活動における活用可能性を示唆している。さらに、ドイツという異なる文化圏における舞楽鑑賞のあり方を通じて、日独間の相互理解と文化交流の深化に貢献するものであり、今後の国際共同研究や文化外交の基盤としても重要な意義をもつといえる。

引用文献

- Christensen, J. F. and Calvo-Merino, B. 2013. "Dance as a Subject for Empirical Aesthetics." *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts* 7(1):76–88.
- Cross, E. S. 2025. "The Neuroscience of Dance Takes Center Stage." *Neuron* 113(6):808–813.
- Daikoku, T. and Yumoto, M. 2020. "Musical Expertise Facilitates Statistical Learning of Rhythm and the Perceptive Uncertainty: A Cross-Cultural Study." *Neuropsychologia* 146:107553.
- Darda, K. M. and Cross, E. S. 2022. "The Role of Expertise and Culture in Visual Art Appreciation." *Scientific Reports* 12(1):10666.
- Grosbras, M. H., Tan, H., and Pollick, F. 2012. "Dance and Emotion in Posterior Parietal Cortex: A Low-Frequency rTMS Study." *Brain Stimulation* 5(2):130–136.
- Hitsuwari, J., Hayashi, T., Woodman, K., Liu, X., Takeura, K., Nishida, S., Du, M., and Nomura, M. 2023. "Scent of Poetry: Influence of Olfactory Imagery During Haiku Appreciation on Aesthetic Evaluation." *The 45th Annual Conference of the Cognitive Science Society* 45:1777–1784.
- Jacobsen, T. 2006. "Bridging the Arts and Sciences: A Framework for the Psychology of Aesthetics." *Leonardo* 39(2):155–162.
- Lee, H., Ashwell, C., Sperling, M., Rai, L., and Orgs, G. 2025. "Engaged and Confused: Aesthetic Appreciation of Live and Screened Contemporary Dance." *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*. Advance online publication.
- Marschallek, B. E., Löw, A., and Jacobsen, T. 2023. "You Can Touch This! Brain Correlates of Aesthetic Processing of Active Fingertip Exploration of Material Surfaces." *Neuropsychologia* 182:108520.
- Masuda, T., Gonzalez, R., Kwan, L., and Nisbett, R. E. 2008. "Culture and Aesthetic Preference: Comparing the Attention to Context of East Asians and Americans." *Personality and Social Psychology Bulletin* 34(9):1260–1275.
- Saito, Y. 2007. "The Moral Dimension of Japanese Aesthetics." *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 65(1):85–97.
- 坂田真己子・八村広三郎・丸茂祐佳. 2003. 「日本舞踊における身体動作からの感性情報の抽出——ビデオ映像を用いた評価実験——」 『情報処理学会研究報告』 2003-CH-60(9):1–8.

Sakata, M. and Kurasaka, S. 2011. “Basic Study in Ma Timing in Gagaku: Between the Dancer and the Ryuteki Player in Bugaku Dance ‘Ryo-Ou’.” In *2011 Second International Conference on Culture and Computing*, 185–186.

Zheng, H., Komatsu, S., Aoki, K., and Kato, C. 2020. “Analysis of the Impressions Before and After Appreciation of Japanese, Chinese and Korean Traditional Dance Based on Text Mining.” *Psychology* 11:845–864.

謝辞

本研究に使用した舞楽の動画を提供してくださった雅楽下熊健さま (<https://gagaku.amebaownd.com/>) に感謝申し上げます。また、本研究は一般財団法人山岡記念財団2024年度「日本と欧州（ドイツ語圏）の若者文化・ライフスタイルの研究」助成ならびに、academist Prize第4期の助成を得て実施されました。重ねて感謝申し上げます。

図表

図1. 舞楽の5つの評価観点における日本人とドイツ人の得点

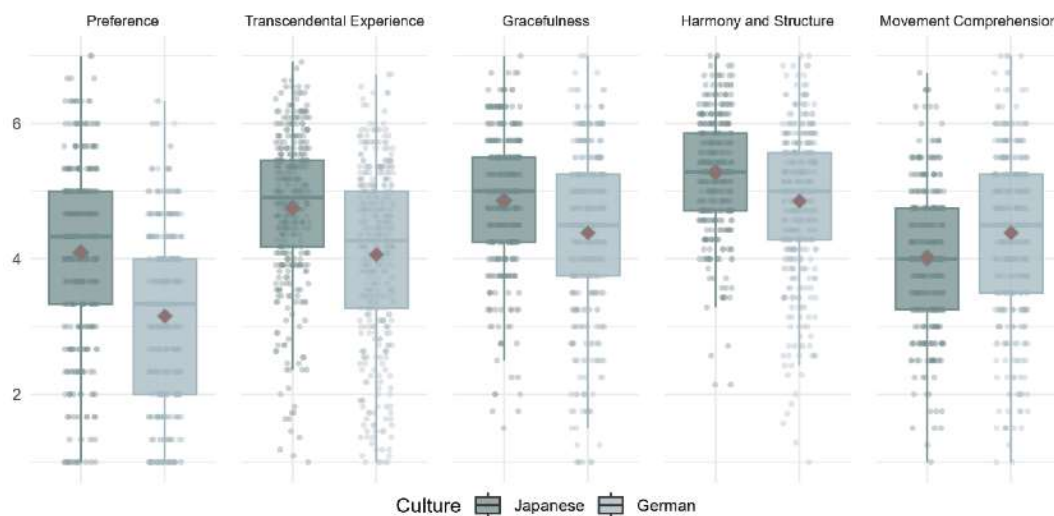


図2. 文化と個人特性の交互作用：動き理解，曖昧さへの不快感，調和と構造が舞楽の評価に与える影響

